

農薬の登録内容は頻りに変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)



野菜



◆**たまねぎ**
◆**施肥**
たまねぎの追肥は2回に分ける。

◆**除草**
追肥後に土寄せを兼ねて中耕を行ない、その後除草剤を散布する。

◆**軟弱野菜**
◆**畑の準備**
土づくりは秋から冬に重点的に行なう。作付けの前に発酵牛糞(カウレックス)や、バーク堆肥などの土づくり資材を10a当たり2000〜3000kg散布す。切りわら500kg程度を散布する(表2)。

◆**病害虫防除**
葉に褐色の病斑が生じ、葉裏に白いかびの発生が見られるべと病は、ハウス栽培では通風が悪いと激発する恐れがある。換気に努め、生育初期にZボルドーを散布し、早期防除を心がける(発病後の防除は、十分な効果が見えにくくなり、病害虫の発生に気づくのが遅れることも多いため、注意する)。

◆**みずな**
◆**病害虫防除**
中株栽培、大株栽培では、株元に菌核病が発生することがある。株元の水はけを良くするとともに、発病株は取り除く。なお、多発した畑では、次年度に水稲を栽培し、発生源となる菌核を死滅させる。

◆**果樹**
来年の病害虫の発生を抑えるため、病害虫の発生源となる落ちた果実や枝葉は園外に持ち去り処分し、病原菌や害虫の卵、幼虫、蛹、成虫の密度を下げておく。

◆**除草**
雑草の発生の多い畑では、除草剤のアーザラン液剤を散布する(表4)。

◆**みかん**
◆**収穫**
傷果や裂果、日焼け果は腐敗しやすいので、混ぜて収穫しないよう注意する。

◆**貯蔵果の予措**
予措とは、収穫後の腐敗果の発生を軽減させるために、果皮を軽く乾燥させること。貯蔵庫

表1.たまねぎの第1回追肥の目安

早晩性	施肥時期	10a当たり成分量(kg)		
		チッソ	リンサン	カリ
早生種	12月中旬	5.6	5.6	5.6
中生種	12月中旬	5.6	4.0	5.2
晩生種	12月中旬	5.2	3.2	4.2

表2.たまねぎ(移植栽培)に登録のあるゴーゴーサン乳剤30について

薬剤名	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
ゴーゴーサン乳剤30	300〜500ml/10a	70〜100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(雑草発生前)ただし収穫60日前まで	1回

表3.しゅんぎくのべと病に登録があるZボルドーについて

薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
Zボルドー	500倍	- / -	100〜300ℓ/10a

※Zボルドーは、野菜類で登録がある。

表4.ほうれんそうに登録のあるアーザラン液剤について

薬剤名	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	使用回数
アーザラン液剤	秋まき 600〜800ml/10a 春〜初夏まき 800〜1000ml/10a ただし、芽出しまきは 800ml/10a	100〜200ℓ/10a	全面土壌散布	は種後〜子葉展開期	1回

◆**被覆**
露地栽培では、塩化ビニール・ポリエチレンなどによるトンネル被覆、不織布・寒冷紗などによるべたがけ被覆などいずれかの方法で保温し、生育を促す。ただし、被覆すると中の様子が見えにくくなり、病害虫の発生に気づくのが遅れることも多いため、注意する。

◆**防寒**
露地では株張り系品種は寒風で葉先が枯れる場合があるので、トンネルなどで保温に努める。

◆**ほうれんそう**
◆**栽培管理**
ほうれんそうは、酸性土壌を

◆**越冬病害虫の防除**
収穫後のミカンハダニやカイガラムシ類の防除には、ハーベストオイル(60〜80倍/10a当たり200〜700ℓ/12〜3月)を葉裏まで丁寧に散布する。ただし、樹勢が弱っていたり、寒害の恐れのある園では、発芽前の3月に散布する。

◆**間伐**
密植園では、中まで十分光が当たらず、果実の品質が低下する。また、風通しも悪くなり、病害虫が発生しやすい。そのため密植園では、せん定の前に思い切って間伐を行なう。



◆**整枝・せん定**
せん定は早すぎないよう注意し、12月に入って気温の高い日が続けば、開始時期を少し遅らせる。せん定の手順は、まず不必要

な徒長枝や大きくなりすぎた側枝を切り、次に主枝の先端から亜主枝、側枝の順に行なう。枝葉に良く日光が当たり、効率的に管理作業ができるような樹形を目指す。園の空間を活かして、園や樹に応じて行なう。せん定には、枝の基部から切る「間引き」と枝の途中で切る「切り返し」がある。樹勢を落ち着かせる「間引き」と、樹勢を強める「切り返し」を組み合わせて行なう。早生種は、樹勢がやや強く保てるよう30cm以上の長果枝を中心に残し、やや強めにせん定する。中・晩生種は、10〜30cmの中果枝や10cm以下の短果枝を中心に残し、樹勢が中位に保てるようにする。

*1 農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/散布液量/使用時期)を表示しています。
*2 農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。



ベビーリーフ
アブラナ科 キクラ科 ヒユ科など

ベビーリーフとは、葉物野菜の若葉を大きくしないうちに摘み取り、カットしないでその独自の葉形や色合い、食感をサラダで楽しむ野菜です。切り口は葉の付け根だけなのでビタミンやミネラルの流失が少なく、活力ある新芽は高い栄養価があります。

欧米では高級レストランや機内食から普及が始まり、一般のスーパリーにもパック入りで並ぶようになりました。日本でも20年前、海外視察に行った外食産業が導入し、種苗会社がベビーリーフ専用の種子を販売したこともあり急速に広まりました。

ベビーリーフサラダには、レタス類を中心に京菜、タアサイ、チンゲンサイ、カラシナ、シユンギクなど葉物野菜であれば、たいてい使用できます。京菜は海外でもKyona、Mizunaなどと呼ばれ、葉形の面白さやシャキッとした食感からベビーリーフサラダには欠かせない品目です。日本野菜や中国野菜が多く使われていることから、オリエンタルミックスやアジア

アンミックスと称されます。

日当たりの良いベランダなら、簡単に周年栽培できます。種は好きな野菜を数点選んでまくこともできますが、「ベビーサラダミックス」や「ガーデンレタスマックス」など複数の袋詰めが便利です。プランターに市販の培養土を入れ、ばらまきにするか、条間10cmの筋まきにします。密にならないように種まきします。10cm四方に20粒ほどが適当です。発芽後、込んだ所は間引きしますが、ミックス種子の場合は葉形と葉色が偏らないように注意します。

柔らかくて厚みのある葉を付けるために、乾燥や肥料切れをさせないようにします。追肥は1000倍の液肥を1週間置きに施します。

10cmくらい伸びたときに生長点を残して切り取ると、また伸びるので何回か収穫できます。

新鮮でおいしいサラダを家庭で楽しんでください。

